

本報告は、平成30年度（2017）より実施している京都・平等院の阿弥陀堂（鳳凰堂と通称する）内の空間荘厳に関する調査成果の一部を報告することを目的とする。

平等院は永延2年（1052）に、左大臣の藤原頼通が父の道長から相続した別荘を寺にあらためたのが始まりである。その翌年に創建されたのが、今に伝わる平安時代の遺構として貴重な鳳凰堂であった。

鳳凰堂内の荘厳に関しては、すでに『平等院大観』第三卷（岩波書店、1992年）における詳細な報告があり、その重厚な内容に追隨の余地はない。この度の調査では、まず『平等院大観』調査当時においては空間の制約上、詳細な調査が難しかった母屋柱及び来迎柱の荘厳に注目した。供養菩薩、奏楽の菩薩及び童子、鳳凰、宝相華のモチーフで構成される各柱の荘厳を紹介する。あわせてこうした柱絵が、『観無量寿経』にもとづいて描かれた扉絵なども含めた鳳凰堂空間の全体構想のなかで、いかなる位置づけをもつものかを考察する。

くわえて鳳凰堂本尊、仏師定朝作の阿弥陀如来坐像の造形的特徴についてあらためて確認したい。本像の様式が、日本の過去の仏像様式、具体的には七世紀後半ごろ、いわゆる白鳳時代の仏像様式を参照して生み出されていることはこれまでも指摘されてきた。過去の仏像様式がいかに参照されたかを精査し、本像の様式的特徴を浮き彫りにすることによって、鳳凰堂空間内で必要とされた仏の理想像が浮かび上がってくるはずである。

ひるがえって、こうした様式形成の上での過去の参照という行為は、柱絵モチーフの着想源をさぐるうえで手掛かりになり、ひいては平安時代中期の文化の成り立ちを考えるうえでも重要な糸口になるものと考えられる。